

北海道に自生するラン科植物の人工繁殖方法と耐凍性

江別市 大沼 弘樹

はじめに

野生のラン科といえば、その多くが長年盗掘の憂き目に遭ってきたり、生育環境の変化や消失で個体数を減らし続けていたり、多難な分類群の筆頭格と言えるでしょう。大規模盗掘は減少傾向にあるものの、開発に伴う移植や仮植え、保護増殖事業、環境変化等に伴う生息域外保全の必要性は、今後高まってゆくことが予想されます。そのような場合、対象種を取り扱うノウハウが事前に蓄積されていれば良いのですが、いざというときに手探りで始めるのは失敗のリスクが高く、かといって事前に栽培試験を行う余裕がない事が往々にしてあります。わざわざ実験のために野生個体を採集するようでは本末転倒ですし、本州方面での栽培技術が、気候が違う北海道で通用するとは限りません。

そこで本稿では、道央圏で20年来にわたって様々なラン科植物の人工繁殖技術を研究してきた筆者の経験をもとに、栽培経験のある種類について、人工繁殖方法と、北海道での栽培に欠かせない耐凍性の知見を簡単にまとめてみました。文末に一覧表を載せてありますが、以下の本文中に補足を入れてあります。

参考にした植物について

本稿作成の参考とした植物は、園芸的に人工繁殖個体が流通している種類に加え、長年にわたり愛好家の方の手元で栽培され

てきた個体を分けて頂いたりしたものを用いており、一部は自生地の定点観察などによる情報も参考としています（詳細は表1に記載）。そのため、人の手元で栽培され、世代を重ねるうちに野生個体とは性質が多少変わってしまっている可能性や、個体群による性質のばらつきを精査できていない可能性もあり、詳細な栽培方法については言及していません。「無いよりはマシ」な最低限の参考情報としてご覧いただければ幸いです。

また、2022年現在、いわゆる「山野草」として市場流通する大半の植物種が、人工繁殖によって安定的に生産されたものですが、ラン科に関しては共生菌への依存度の高さや、繁殖の難しさ、病虫害への弱さといった要因から、栽培すら不可能に近いにもかかわらず、未だに野生採集品が販売されている事例も散見されます（道内に分布する種類の例ではイチヨウラン、エゾスズラン、エゾチドリ、ギンランの仲間、コケイラン、トケンラン、サイハイラン、スズムシソウの仲間、ヒメホテイランなど）。このような消費的な栽培を促しかねない情報提供は乱獲を増長させますので、本稿では、あくまで栽培と人工繁殖が可能な種類のみ取り上げていますことをご了承ください。

そもそも栽培可能とは？

本題に入る前に、そもそもランに関して